

博士論文（要約）

論文題目 日本古代国家と辺境

氏 名 大高 広和

目次

| | |
|-----------------------------|-------|
| 序章 | 1 頁 |
| 第一部 古代日本の辺境認識と律令 | |
| 第一章 大宝律令の制定と「蕃」「夷」 | 15 頁 |
| 第二章 日唐律令における帰化規定 | 57 頁 |
| 第二部 辺境防衛体制の展開と辺境支配 | |
| 第一章 律令における辺境防衛体制と古代山城 | 83 頁 |
| 第二章 八世紀における辺境防衛体制の展開 | 109 頁 |
| 第三章 胆沢城鎮守府と九世紀の北辺支配 | 139 頁 |
| 終章 一総括と展望一 | 177 頁 |

本文

本論文の内容については、5 年以内に出版予定である。

参考文献一覧（著者五十音、初出順）

〔書籍・論文〕

- 相曾貴志「「復」と「免課役」について」（『続日本紀研究』二五四、一九八七年）
- 青木和夫「浄御原令と古代官僚制」（『日本律令国家論攷』岩波書店、一九九二年、初出一九五四年）
- 青木和夫「律令論」（『日本律令国家論攷』岩波書店、一九九二年、初出一九六五年）
- 阿部義平「徳丹城とその施釉瓦について」（『国立歴史民俗博物館研究報告』六、一九八五年）
- 荒木陽一郎「蝦夷の呼称・表記をめぐる諸問題 第二回」（『弘前大学国史研究』八八、一九九〇年）
- 五十嵐一治「払田柵外柵域における官衙施設の様相」（『月刊考古学ジャーナル』六六九、二〇一五年）
- 池田温「唐令と日本令（二）『唐令拾遺補』の訂補」（『創価大学人文論集』一一、一九九九年）
- 石井正敏「日本・渤海交渉と渤海高句麗継承国意識」（『日本渤海関係史の研究』吉川弘文館、二〇〇一年、初出一九七五年）
- 石上英一「『令集解』金沢文庫本の再検討」（『日本古代史料学』東京大学出版会、一九九七年、初出一九七九年）
- 石上英一「古代国家と対外関係」（『講座日本歴史』二古代二、東京大学出版会、一九

八四年)

- 石上英一「古代東アジア地域と日本」(『日本の社会史』一、岩波書店、一九八七年)
- 石母田正「日本古代における国際意識について」(『古代国家論』石母田正著作集四、岩波書店、一九八九年、初出一九六二年)
- 石母田正「天皇と「諸蕃」」(『古代国家論』石母田正著作集四、岩波書店、一九八九年、初出一九六三年)
- 石母田正『日本の古代国家』(岩波書店、一九七一年)。
- 泉谷康夫「国掌について」(『律令制度崩壊過程の研究』吉川弘文館、一九七五年、初出一九六五年)
- 伊瀬仙太郎「周辺諸民族の中国内徙について」(『内陸アジア史論集』二、一九七九年、初出一九六四年)
- 磯村幸男「西日本の古代山城」(森公章編『史跡で読む日本の歴史3 古代国家の形成』吉川弘文館、二〇一〇年)
- 板楠和子「「肥後国」と「鞠智城」」(熊本県教育委員会『鞠智城跡II』熊本県文化財調査報告第二七六集、二〇一二年)
- 板橋源「胆沢鎮守府考其一」(『岩手大学学芸学部研究年報』六 - 一、一九五四年)
- 伊藤循「古代王権と異民族」(『歴史学研究』六六五、一九九四年)
- 伊藤循「古代国家の蝦夷支配」(鈴木靖民編『古代蝦夷の世界と交流』名著出版、一九九六年)
- 伊藤敏雄「中国古代における蛮夷支配の系譜」(『中国古代の国家と民衆』汲古書院、一九九五年)
- 伊藤博幸「奥六郡成立の史的前提」(『岩手考古学』三、一九九一年)
- 伊藤博幸「胆沢城跡殿門跡の発掘調査」(『日本考古学』一〇、二〇〇〇年)
- 伊藤博幸「鎮守府領と奥六郡の再検討」(蝦夷研究会編『古代蝦夷と律令国家』高志書院、二〇〇四年)
- 井上秀雄『古代日本人の外国観』(学生社、一九九一年)
- 井上光貞「日本律令の成立とその注釈書」(『日本古代思想史の研究』井上光貞著作集二、岩波書店、一九八六年、初出一九七六年)
- 今泉隆雄「エミシの朝貢と饗給」(高橋富雄編『東北古代史の研究』吉川弘文館、一九八六年)
- 今泉隆雄「古代東北城柵の城司制」(羽下徳彦編『北日本中世史の研究』吉川弘文館、一九九〇年)
- 今泉隆雄「律令と東北の城柵」(新野直吉諸戸立雄両教授退官記念会編『秋田地方史の展開』みしま書房、一九九一年)
- 今泉隆雄「律令における化外人・外蕃人と夷狄」(羽下徳彦編『中世の政治と宗教』吉川弘文館、一九九四年)
- 今泉隆雄「多賀城の創建」(『条里制・古代都市研究』一七、二〇〇一年)

- 今平利幸「「烽家」墨書土器について」（シンポジウム「古代国家とのろし」宇都宮市
実行委員会／平川南／鈴木靖民編『烽〔とぶひ〕の道』青木書店、一九九七年）
- 石見清裕「唐の突厥遺民に対する措置」（『唐の北方問題と国際秩序』汲古書院、一九
九八年、初出一九八六年）
- 石見清裕「唐代の帰化と諸蕃」（『中国古典研究』三三、一九八八年）
- 石見清裕「唐の内附異民族対象規定」（『唐の北方問題と国際秩序』汲古書院、一九九八
年、初出一九九五年）
- 石見清裕「唐代内附民族対象規定の再検討」（『東洋史研究』六八 - 一、二〇〇九年）
- 榎本淳一「律令国家の対外方針と「渡海制」」（『唐王朝と古代日本』吉川弘文館、二〇
〇八年、初出一九九一年）
- 榎本淳一「養老律令試論」（笹山晴生先生還暦記念会編『日本律令制論集』上、吉川弘文
館、一九九三年）
- 榎本淳一「広橋家本「養老衛禁律」の脱落条文の存否」（『唐王朝と古代日本』吉川弘文
館、二〇〇八年、初出一九九八年）
- 榎本淳一「北宋天聖令による唐関市令朝貢・貿易管理規定の復原」（『唐王朝と古代日本』
吉川弘文館、二〇〇八年）
- 遠藤巖「「北の押え」の系譜」（荒野泰典・石井正敏・村井章介編『アジアのなかの日
本史Ⅱ 外交と戦争』東京大学出版会、一九九二年）
- 大石直正「中世の黎明」（『中世奥羽の世界』東京大学出版会、一九七八年）
- 大隅清陽「大宝律令の歴史的位相」（大津透編『日唐律令比較研究の新段階』山川出版社、
二〇〇八年）
- 大津透「唐律令国家の予算について」（『日唐律令制の財政構造』岩波書店、二〇〇六
年、初出一九八六年）
- 大津透「近江と古代国家」（『律令国家支配構造の研究』岩波書店、一九九三年、初出
一九八七年）
- 大津透「律令法と固有法的秩序」「格式の成立と撰関期の法」（水林彪ほか編『新体系日
本史2 法社会史』、山川出版社、二〇〇一年）
- 大津透「「日本」の成立と律令国家」（『日本古代史を学ぶ』岩波書店、二〇〇九年、
初出二〇〇四年）
- 大原良通「唐の節度使と日本の遣唐使」（『王権の確立と授受』汲古書院、二〇〇三年、
初出一九九三年）
- 小川秀樹「豊前・御所ヶ谷山城」（『古代文化』六二 - 二、二〇一〇年）
- 奥野中彦「日本の防人制について」（『日本古代・中世の国家軍制』上、岩田書院、二
〇一一年、初出一九八六年）
- 鏡山猛「怡土城趾の調査」（『日本古文化研究所報告』第六、一九三七年）
- 鏡山猛「帯隈山神籠石」（佐賀県教育委員会『帯隈山遺跡とその周辺』佐賀県文化財調
査報告書第一六集、一九六七年）

- 柿本奨『大和物語の注釈と研究』（武蔵野書院、一九八一年）
- 鐘江宏之「八・九世紀における陸奥・出羽国域と北方管轄についての覚書」（『市史研究あおもり』五、二〇〇二年）
- 鐘江宏之「藤原京造営期の日本における外来知識の摂取と内政方針」（鐘江宏之・鶴間和幸編著『東アジア海をめぐる交流の歴史的展開』東方書店、二〇一〇年）
- 亀田隆之「大宝軍防令」（『日本古代制度史論』吉川弘文館、一九八〇年、初出一九七〇年）
- 河原梓水「九世紀における蝦夷の宮廷儀礼参加とその意義」（『立命館文学』六二四、二〇一二年）
- 菅野成寛「奥六郡の関と津」（蝦夷研究会編『古代蝦夷と律令国家』高志書院、二〇〇四年）
- 菊池達也「隼人の「朝貢」」（『史学研究』二七六、二〇一二年）
- 菊池英夫「唐代辺防機関としての守捉・城・鎮等の成立過程について」（『東洋史学』二七、一九六四年）
- 菊池英夫「西域出土文書を通じてみたる唐玄宗時代における府兵制の運用（下）」（『東洋学報』五二・四、一九七〇年）
- 菊池英夫「府兵制度の展開」（『岩波講座世界歴史』五、岩波書店、一九七〇年）
- 菊池英夫「日唐軍制比較研究上の若干の問題」（唐代史研究会編『隋唐帝国と東アジア世界』汲古書院、一九七九年）
- 岸俊男「防人考」（『日本古代政治史研究』塙書房、一九六六年、初出一九五五年）
- 岸俊男「木簡と大宝令」（『日本古代文物の研究』塙書房、一九八八年、初出一九七九年）
- 北啓太「天平四年の節度使」（土田直鎮先生還暦記念会編『奈良平安時代史論集』上巻、吉川弘文館、一九八四年）
- 北啓太「征夷軍編成についての一考察」（『書陵部紀要』三九、一九八七年）
- 北啓太「律令国家における将軍について」（笹山晴生先生還暦記念会編『日本律令制論集』上、吉川弘文館、一九九三年）
- 工藤雅樹「多賀城の起源とその性格」（伊東信雄・高橋富雄編『古代の日本8東北』角川書店、一九七〇年）
- 窪田大介「承和二年十二月三日官符の歴史的意義」（『弘前大学国史研究』一一二、二〇〇二年）
- 熊谷公男「黒川以北十郡の成立」（『東北文化研究所紀要』二一、一九八九年）
- 熊谷公男「平安初期における征夷の終焉と蝦夷支配の変質」（『東北文化研究所紀要』二四、一九九二年）
- 熊谷公男「「受領官」鎮守府将軍の成立」（羽下徳彦編『中世の地域社会と交流』吉川弘文館、一九九四年）
- 熊谷公男「養老四年の蝦夷の反乱と多賀城の創建」（『国立歴史民俗博物館研究報告』八四、二〇〇〇年）

- 熊田亮介「蝦夷と古代国家」（『古代国家と東北』吉川弘文館、二〇〇三年、初出一九九二年）
- 熊田亮介「古代国家と蝦夷・隼人」（『古代国家と東北』吉川弘文館、二〇〇三年、初出一九九四年）
- 熊田亮介「古代国家と「夷狄」」（『古代国家と東北』吉川弘文館、二〇〇三年、初出一九九六年）
- 倉住靖彦「大野城司考」（九州大学国史学研究室編『古代中世史論集』吉川弘文館、一九九〇年）
- 河内春人「唐から見たエミシ」（『東アジア交流史のなかの遣唐使』汲古書院、二〇一三年、初出二〇〇四年）
- 神野志隆光「「日本」をめぐって」（『万葉』一七九、二〇〇二年）
- 小島憲之『国風暗黒時代の文学』補篇（塙書房、二〇〇二年）
- 小林昌二『高志の城柵』（高志書院、二〇〇五年）
- 齋藤勝「唐代内附異民族への賦役規定と辺境社会」（『史学雑誌』一一七・三、二〇〇八年）
- 坂上康俊「律令国家の法と社会」（『日本史講座』二、東京大学出版会、二〇〇四年）
- 坂上康俊「対馬・金田城の発掘成果」（『海路』四、二〇〇七年）
- 坂上康俊「文献からみた鞠智城」（『鞠智城とその時代』熊本県立装飾古墳館分館歴史公園鞠智城・温故創生館、二〇一一年）
- 坂上康俊「律令制の形成」（『岩波講座日本歴史』三、岩波書店、二〇一四年）
- 坂本太郎「大宝令と養老令」（『律令制度』坂本太郎著作集七、吉川弘文館、一九八九年、初出一九六九年）
- 坂元義種「按察使制の研究」（『ヒストリア』四四・四五、一九六六年）
- 佐々木茂楨「多賀城と玉造等諸柵」（『国史談話会雑誌』豊田・石井両先生退官記念号、一九七三年）
- 佐々木常人「鎮兵小考」（『東北歴史資料館研究紀要』一一、一九八五年）
- 笹山晴生「鞠智城と古代の西海道」（笹山晴生監修『古代山城鞠智城を考える』山川出版社、二〇一〇年）
- 佐藤信「古代国家と烽制」（シンポジウム「古代国家とのろし」宇都宮市実行委員会／平川南／鈴木靖民編『烽〔とぶひ〕の道』青木書店、一九九七年）
- 重松敏彦「平安初期における日本の国際秩序構想の変遷」（『九州史学』一一八・一一九、一九九七年）
- 島方洗一企画・編集統括『地図でみる西日本の古代』（平凡社、二〇〇九年）
- 末永浩一「唐原山城跡の調査」（『溝漣』一三、二〇〇七年）
- 末永浩一「唐原山城跡」（『古代文化』六一・四、二〇一〇年）
- 鈴木拓也「古代陸奥国の軍制」（『古代東北の支配構造』吉川弘文館、一九九八年、初出一九九一年）

- 鈴木拓也「古代陸奥国の官制」（『古代東北の支配構造』吉川弘文館、一九九八年、初出一九九四年）
- 鈴木拓也「陸奥・出羽の調庸と蝦夷の饗給」（『古代東北の支配構造』吉川弘文館、一九九八年、初出一九九六年）
- 鈴木拓也「律令国家転換期の王権と隼人政策」（『国立歴史民俗博物館研究報告』一三四、二〇〇七年）
- 鈴木拓也「軍制史からみた古代山城」（『古代文化』六一・四、二〇一〇年）
- 鈴木靖民「奈良時代における対外意識」（『古代対外関係史の研究』吉川弘文館、一九八五年、初出一九六九年）
- 曾我部静雄「復について」（『日本歴史』四一四、一九八二年）
- 高橋千晶「胆沢城と蝦夷社会」（蝦夷研究会編『古代蝦夷と律令国家』高志書院、二〇〇四年）
- 高橋富雄『蝦夷』（吉川弘文館、一九六三年）
- 高橋富雄「古代の烽とその遺跡」（伊東信雄先生還暦記念会『日本考古学・古代史論集』吉川弘文館、一九七四年）
- 瀧川政次郎「律令時代の国防と烽燧の制」（『律令諸制及び令外官の研究』法制史論叢第四冊、角川書店、一九六七年、初出一九五二年）
- 武廣亮平「日本古代の「夷狄」支配と「蝦夷」」（『歴史学研究』六九〇、一九九六年）
- 田中聡「夷人論」（『日本古代の自他認識』塙書房、二〇一五年、初出二〇〇二年）
- 田中卓「天智天皇と近江令」（『律令制の諸問題』田中卓著作集六、国書刊行会、一九八六年、初出一九六〇年）
- 谷山雅彦『鬼ノ城』（同成社、二〇一一年）
- 田平徳栄「基肄城考」（九州歴史資料館編『大宰府古文化論叢』上巻、一九八三年）
- 長洋一「広嗣の乱と鎮の所在地」（『九州史学』七九、一九八四年）
- 長洋一「古代西辺の防衛と防人」（『古代文化』四七・一一、一九九五年）
- 津嶋知弘「志波城と蝦夷社会」（蝦夷研究会編『古代蝦夷と律令国家』高志書院、二〇〇四年）
- 土田直鎮「石城石背両国建置沿革余考」（『奈良平安時代史研究』吉川弘文館、一九九二年、初出一九五二年）
- 直木孝次郎『持統天皇』（吉川弘文館、一九六〇年）
- 中村裕一「『文館詞林』巻次未詳残簡「勅」考証」（『唐代制勅研究』汲古書院、一九九一年、初出一九七三年）
- 中村裕一「唐代嶺南税制試釈」（『唐令逸文の研究』汲古書院、二〇〇五年）
- 永山修一「隼人の「消滅」」（『隼人と古代日本』同成社、二〇〇九年）
- 成沢光「蕃国と小国」（『政治のこぼれ』平凡社、一九八四年、初出一九七五年）
- 仁井田陞『唐令拾遺』（東京大学出版会、一九六四年覆刻版、初発行一九三三年）
- 仁井田陞著・池田温編集代表『唐令拾遺補』（東京大学出版会、一九九七年）

- 西野修「徳丹城と蝦夷社会」（蝦夷研究会編『古代蝦夷と律令国家』高志書院、二〇〇四年）
- 野村忠夫「養老律令の編纂」（『律令政治の諸様相』塙書房、一九六八年、初出一九六六年）
- 野村忠夫「官人的把笏の問題」（『律令官人制の研究』吉川弘文館、一九六七年）
- 朴昔順「日本古代国家の「化」の概念」（『東京大学日本史学研究室紀要』二、一九九八年）
- 朴昔順「日本古代国家の対「蕃」認識」（『日本歴史』六三七、二〇〇一年）
- 濱口重国「府兵制度より新兵制へ」（『秦漢隋唐史の研究』上、東京大学出版会、一九六六年、初出一九三〇年）
- 早川庄八「天平六年出雲国計会帳の研究」（『日本古代の文書と典籍』吉川弘文館、一九九七年、初出一九六二年）
- 早川庄八「公式様文書と文書木簡」（『日本古代の文書と典籍』吉川弘文館、一九九七年、初出一九八五年）
- 早川庄八「東アジア外交と日本律令制の推移」（『天皇と古代国家』講談社学術文庫、二〇〇〇年、初出一九八八年）
- 原宗子「「農本」主義の採用過程と環境」（『「農本」主義と「黄土」の発生』研文出版、二〇〇五年、初出一九九六年）
- 原田諭「天平の節度使について」（『続日本紀研究』三二一、一九九九年）
- 日野開三郎「唐の賦役令の嶺南税戸米」（『日野開三郎東洋史学論集』十二、三一書房、一九八九年、初出一九八四年）
- 日野尚志「古代山城と軍団」（広島史学研究会編『史学研究五十周年記念論叢』日本編、福武書店、一九八〇年）
- 平川南「古代の城柵に関する試論」（原始古代社会研究会編『原始古代社会研究』四、校倉書房、一九七八年）
- 平川南「線引き用定木一岩手県水沢市胆沢城跡」（『古代地方木簡の研究』吉川弘文館、二〇〇三年、初出一九八七年）
- 平野邦雄「国際関係における「帰化」と「外蕃」」（『大化前代政治過程の研究』吉川弘文館、一九八五年、初出一九八〇年）
- 渕原智幸「平安前期東北史研究の再検討」（『平安期東北支配の研究』塙書房、二〇一三年、初出二〇〇二年）
- 渕原智幸「九世紀陸奥国の蝦夷・俘囚支配」（『平安期東北支配の研究』塙書房、二〇一三年、初出二〇〇四年）
- 渕原智幸「磐井郡の成立」（『平安期東北支配の研究』塙書房、二〇一三年、初出二〇〇五年）
- 古畑徹「七世紀末から八世紀初にかけての新羅・唐関係」（『朝鮮学報』一〇七、一九八三年）

- 北條秀樹「令集解「穴記」の成立」（『日本古代国家の地方支配』吉川弘文館、二〇〇〇年、初出一九七八年）
- 北條秀樹「藤原広嗣の乱の基礎的考察」（『日本古代国家の地方支配』吉川弘文館、二〇〇〇年、初出一九八八年）
- 北條秀樹「初期大宰府軍制と防人」（『日本古代国家の地方支配』吉川弘文館、二〇〇〇年、初出一九九一年）
- 北條秀樹「『肥前国風土記』の成立」（『日本古代国家の地方支配』吉川弘文館、二〇〇〇年、初出一九九五年）
- 保科富士男「古代日本の対外関係における贈進物の名称」（『白山史学』二五、一九八九年）
- 保科富士男「古代日本の対外意識」（田中健夫編『前近代の日本と東アジア』吉川弘文館、一九九五年）
- 堀敏一「中華世界」（『東アジアのなかの古代日本』研文出版、一九九八年、初出一九九七年）
- 松本政春「大宝軍防令の復原的研究」（『律令兵制史の研究』清文堂、二〇〇二年、初出一九七一年）
- 松本政春「七世紀末の王権防衛構想」（『日本史研究』五五五、二〇〇八年）
- 丸山裕美子「北宋天聖令による唐日医疾令の復原試案」（『愛知県立大学日本文化学部論集』歴史文化学科編一、二〇〇九年）
- 三上喜孝「古代「辺境」の民衆把握」（『歴史と地理』五四五、二〇〇一年）
- 三上喜孝「唐令から延喜式へ」（大津透編『日唐律令比較研究の新段階』山川出版社、二〇〇八年）
- 三嶋隆儀・庄内昭男「男鹿市小谷地遺跡の墨書土器」（『秋田県立博物館研究報告』一二、一九八七年）
- 水本浩典「令集解」（皆川完一・山本信吉編『国史大系書目解題』下、吉川弘文館、二〇〇一年）
- 向井一雄「日本の古代山城研究の成果と課題」（『溝渚』一四、二〇〇九年）
- 向井一雄「古代山城論」（『古代文化』六二 - 二、二〇一〇年）
- 村上幸雄「鬼ノ城」（『古代文化』六一 - 四、二〇一〇年）
- 森公章「古代日本における対唐観の研究」（『古代日本の対外認識と通交』吉川弘文館、一九九八年、初出一九八八年）
- 森田悌「地方行政機構についての考察」（『平安時代政治史研究』吉川弘文館、一九七八年）
- 山田勝芳「秦漢代の復除」（『秦漢財政収入の研究』汲古書院、一九九三年、初出一九八九・一九九〇年）
- 山本崇・高橋学「胡桃館遺跡出土木簡の再釈読について」（『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』二〇、二〇〇六年）

山元敏裕「古代山城屋嶋城について」（地方史研究協議会編『歴史に見る四国』雄山閣、二〇〇八年）

横田義章「大野城の建物」（九州歴史資料館編『大宰府古文化論叢』上巻、一九八三年）

吉川真司「律令体制の形成」（『日本史講座』一、東京大学出版会、二〇〇四年）

吉川真司「律令体制の展開と列島社会」（『列島の古代史8 古代史の流れ』岩波書店、二〇〇六年）

吉田孝「類聚三代格」（坂本太郎・黑板昌夫編『国史大系書目解題』上、吉川弘文館、一九七一年）

吉田孝「律令と格」（岡崎敬・平野邦雄編『古代の日本9 研究資料』角川書店、一九七一年）

吉田孝「名例律継受の諸段階」（彌永貞三先生還暦記念会編『日本古代の社会と経済』上、吉川弘文館、一九七八年）

吉田孝『律令国家と古代の社会』（岩波書店、一九八三年）

吉永匡史「軍防令研究の新視点」（大津透編『律令制研究入門』名著刊行会、二〇一一年）

利光三津夫「養老律本文の探求」（『律の研究』明治書院、一九六一年、初出一九五九年）

渡辺信一郎「唐代前期における農民の軍役負担」（『中国古代の財政と国家』汲古書院、二〇一〇年、初出二〇〇三年）

渡邊義浩「華夷思想と「徙戎論」」（『西晋「儒教国家」と貴族制』汲古書院、二〇一〇年）

〔遺跡調査報告書〕

秋田県教育委員会『払田柵跡 一第一四六次・第一四七次調査 関連遺跡の調査概要一』（二〇一四年）

秋田市教育委員会・秋田城跡調査事務所『秋田城跡一政庁跡一』（二〇〇二年）

岡山市教育委員会『大廻小廻山城跡発掘調査報告』（一九八九年）

熊本県教育委員会『鞠智城跡Ⅱ』（熊本県文化財調査報告第二七六集、二〇一二年）

佐賀県教育委員会『おつぼ山神籠石』（佐賀県文化財調査報告書第一四集、一九六五年）

西条市教育委員会『史跡永納山城跡Ⅱ』（西条市埋蔵文化財発掘調査報告書第三集、二〇一二年）

総社市教育委員会『古代山城 鬼ノ城』（総社市埋蔵文化財発掘調査報告一八、二〇〇五年）

高松市教育委員会『屋嶋城跡Ⅱ』（高松市埋蔵文化財調査報告第一一三集、二〇〇八年）

前原市教育委員会『国指定史跡 怡土城跡』（前原市文化財調査報告書第九四集、二〇〇六年）

行橋市教育委員会『史跡 御所ヶ谷神籠石Ⅰ』（行橋市文化財調査報告書第三三集、二

〇〇六年)

〔主要典拠史料〕

新訂増補国史大系（吉川弘文館）…続日本後紀、日本文徳天皇実録、日本三代実録、類聚国史、日本紀略、令義解、令集解、類聚三代格、類聚符宣抄、本朝世紀
新編日本古典文学全集（小学館）…古事記、日本書紀、万葉集
新日本古典文学大系（岩波書店）…続日本紀
訳注日本史料（集英社）…日本後紀
改訂増補故実叢書（明治図書出版）…西宮記、北山抄
『大日本古文書』編年文書
中華書局評点本…宋書、旧唐書、新唐書、大唐六典、通典、資治通鑑
中華書局影印本…冊府元龜
上海古籍出版社評点本…唐会要
天一閣博物館・中国社会科学院歴史研究所天聖令整理課題組校証『天一閣蔵明鈔本天聖令校証』（中華書局、二〇〇六年）
律令研究会編『訳註日本律令』二・三（東京堂出版、一九七五年）

論文の内容の要旨

本論文では、辺境地域やその人々に対する国家の認識や施策を分析した。本論文の特色は、古代国家の辺境認識（対外認識）、特にその基礎に据えられてきた律令の検討や、それを下敷きとして諸史料を検討にすることで提示されてきた辺境認識について、根本的な見直しを試みたことである。大宝律令はあくまで八世紀初頭という限定された時代の産物であり、またそれは唐律令によって規定されているという視角が本論文全体の基礎となっている。また、辺境における様々な危機や課題に対する対応で最も顕著な分野である軍事、特にその展開を分析しやすい平時の辺境防衛体制を考察対象とし、九世紀までの日本古代国家と辺境との関係を明らかにした。各章の内容は以下の通りである。

第一部 古代日本の辺境認識と律令

第一部第一章「大宝律令の制定と「蕃」「夷」」

律令とその註釈書がもつ同時代性と、日本律令がもつ唐律令からの継受の側面とを主な立脚点として、古代日本で明確に法制化されていたとされてきた「諸蕃」や「夷狄」という概念に対して批判を加えた。日本律令の制定段階においてそのような独自の対外認識を構築したことは認められず、むしろ古代日本においても「蕃」と「夷」とは明確には区別されてはいなかったことを明らかにした。八世紀前半には「蕃」を朝鮮諸国とする意識が成立したことは認められるが、唯一「諸蕃」と「夷狄」という概念を明確に

できるのは九世紀前半の『令義解』を待たなければならない。唐にならって「小帝国」たらんとした古代日本は、自らを「中華」とする意識だけは明確にしていたが、「化外」の存在は、朝鮮諸国・列島内の諸種族それぞれとの歴史的関係・現状に基づいた個別的な認識がまずあったと考えるべきである。そうした状況において、「華」と「蕃・夷」の二分法からなる中華思想は、古代日本の「小帝国」においてはうまく存立しえず、それが「小帝国」構造の実態であった。

古代国家の対外認識の問題について問い直し、「諸蕃」と「夷狄」という、これまで研究者による古代国家の対外認識として当然のものとなっていた枠組みの見直しを図った。また、古代国家のあり方や理念を規定したものとみなされてきた大宝律令そのものについても、相対化することとなった。

第一部第二章「日唐律令における「帰化」規定」

第一章で論じ残した日唐律令の間で差異が大きいとみられてきた「帰化」規定について、律令が元々もっている理念性やフィクション性を実際の状況と対照することで、その性格を明らかにした。

日本賦役令没落外蕃条は、唐令の「夷獠新招慰」についての規定を削除して成立しているが、その理由は「招慰」という語のもつ意味によるのではなく、唐初から特殊な賦課規定をもっていた「夷獠」という存在による。天聖令公開以前に考えられていたように、「夷狄」についての規定を削除したわけではない。唐律令が基本法典としての規範性や行政法としての性格をもっていることに注意して、唐の遊牧民に対する現実的な「帰化」への対応状況なども踏まえると、律令規定通りの手続が行われない「帰化」も想定でき、そうした様々な「帰化」に対する賦課規定などが唐には存在していた。一方、日本令の「帰化」規定の適用対象となったのは結果的に朝鮮諸国からの人々のみであったが、日本令自体は蝦夷・隼人などの「帰化」を否定はしていない。律令「帰化」規定は「帰化」の際の行政的な手続きの規定にすぎず、その適用の有無は「帰化」の対象かどうかという問題とは別次元である。そしてそのこともまた、唐令の文章を継受した結果と言える。

第二部 辺境防衛体制の展開と辺境支配

第二部第一章「律令における辺境防衛体制と古代山城」

古代国家の辺境防衛体制は、大宝律令の段階では防人や古代山城など、北部九州を中心とした西日本に大陸からの侵攻を意識して構築された点に特徴があり、地続きの辺境である東北方面や南九州における特別な辺境防衛制度は構想されなかった。こうした唐制とは構造上大きく異なる状況は、蝦夷の「反乱」などの軍事的緊張の高まりを受けて変更を余儀なくされるが、相対的に地続きの辺境に対する軍事的危機意識が弱い、八世紀初めの古代国家の辺境認識を浮き彫りにする。七世紀後半に百済亡命貴族の関与により築造された古代山城は、重要な存在として律令にも規定されたが、大陸との軍事的緊

張のなかで構築されたもので、予期される戦闘の質の違いから東北の城柵とは区別されていると考えられ、養老律令編纂期にあたる八世紀第一四半期には大半の山城はその役割を終えつつあった。

第二部第二章「八世紀における辺境防衛体制の展開」

中国の軍事・軍制に関する日本側の知識の問題や、防衛施設の地勢的問題に注目しながら、八世紀における辺境防衛体制の展開を考察した。養老四年（七二〇）からの対蝦夷戦争の本格化・深刻化を受けて、八世紀初めには取り入れられなかった唐制が鎮官・鎮兵制などとして改めて導入されていった。東北では、蝦夷に対する前線地帯にまで城柵が構築され、長上兵の鎮兵が配備された。また東北だけでなく、対新羅関係の悪化も背景に、節度使により沿岸警備体制が整備されるなど、西日本の辺境防衛体制にも新たな動きがあった。その中での鎮・鎮所という語の登場は、養老の遣唐使との関係を明瞭に指摘できる。その後の吉備真備による怡土城の造営も中国からの知識の移入という流れに位置づけられ、これらは七世紀の対外的な緊張の高まりから築造され、既に存在意義を失いつつあった多くの古代山城と好対照をなす。やや前線からは奥まって位置する西日本の古代山城の立地に対し、東北の城柵は前線地帯にまで構築され、防人と同様に長上兵であった鎮兵は、主に前線の城柵に駐屯する兵力であった。

第二部第三章「胆沢城鎮守府と九世紀の北辺支配」

前線に駐屯した鎮兵を統括する役割を基本とした鎮守府は、九世紀以降、胆沢城において陸奥国から一定の独立性をもって北辺の支配を担当する機関に変質する。これは地方官制としても軍事制度としても異例であるが、特に九世紀の胆沢城鎮守府の機能や北辺情勢をめぐる議論があり、その止揚を図った。

これまで注目されてこなかった鎮守府府掌について検討を加え、九世紀の胆沢城鎮守府においては軍事的職掌のほかには蝦夷との関係、特に饗給による服属関係の維持・構築が役割として重視されるようになったことを明らかにした。鎮守府は「征夷」や公民支配領域の拡大という八世紀以来の古代国家の辺境政策が放棄される中で、陸奥国の一部として北辺支配に責任を負う存在として存続した。古代国家の公民支配が貫徹した地域は胆沢城周辺の胆沢・江差二郡までだったと考えられるが、その外側に関しても服属関係の構築などにより影響力の維持・行使が行われたとみられる。

以上の各章での検討を通して、中国王朝の制度・思想の直接的影響を受けながら展開した七世紀後半以来の古代国家の辺境との関係に新たな光を当て、その特質を明らかにした。